跡見学園女子大学紀要　第十三号（一九八〇年月三日十五）

沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化

――覚書として――

渡辺欣雄
植松明石

要旨

本報告は、沖縄文化の影響圏内にある島々との文化交流を除き、とくに与那国島と台湾島・中国大陸、およびその他の地域との文化接触・文化交流を、神話・伝説および交通交易などのデータをもとにして描写しようとするものである。

第Ⅰ章　研究の経過・概略

本報告は、昭和五十三年度における文部省科学研究費補助金による与那国島の調査研究で得られたデータにもとづき、主として外来文化の所在と、与那国島との接触・交流を描くことを目的とした研究の覚書である。調査は、両者それぞれ五十日余を費して行なったものであるが、課題・対象のひろさから、調査補助者として、東京都立大学大学院の杉島敬志氏、明治大学大学院の植野弘子氏の援助をあおいだ。また厖大な資料収集・整理には、跡見学園女子大学民俗文化研究調査会助手の大沼美智子氏の協力をえた。補助金による研究課題は、「沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化――周辺諸文化との比較研究――」（課題番号　三五一〇六五）と題するものであった。この研究には、研究報告提出の義務があり、とくに昭和五十四年度には、昭和五十三年度の調査研究のための補助金にくわえて、研究発表や報告のための補助金も交付されるはこびとなった。そのため、調査研究のために発足させた「与那国研究会」を、本年度もひきつづき研究発表・報告の母体として継続させ、研究発表、報告の準備として、毎月一回会合をもったほか、学会発表をおこなった。研究会として共同発表をおこなったのは、昭和五十四年十月七日、大正大学で開催された、第三十一回日本民俗学会年会においてであり、以下の表題のもとに、成果を公表した。

沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化――周辺諸文化との比較研究――……渡辺欣雄

渡辺欣雄・植松明石　二

与那国島における儀礼と信仰……植松明石

与那国島における祖先祭祀――〈種〉と〈サワリ〉の観念を中心として……杉島敬志

与那国島における親族と婚姻――兄弟姉妹・姻族・シマ――……植野弘子

ついで、研究代表者である渡辺はさらに、自分の課題として、第八回南島史学会八重山大会にて、つぎのような発表を、石垣市宮平観光ホテルにて、昭和五十四年十一月二十三日におこなった。

与那国島における親族用語の体系とその変化……渡辺欣雄

以上の一連の発表は、補助金により、『与那国の文化』と題しその要旨を載せ、未発表資料をもくわえて、発行することができた（昭和五十五年三月刊）。

今回、ここに報告するものは、日本民俗学会にて研究発表をおこなった部分の問題についてである。『与那国の文化』に掲載した内容は、主として伝統文化の内容の記述であり、今回のこの報告は、予算や紙幅の関係上、掲載できなかった、〝外来文化〟の問題にかかわるものであり、伝統文化の記述と分析にくらべて、今後に残された問題のかなり多い部分である。

本報告の素材や資料は、昭和五十三年度におこなった聴取調査によるものであり、したがってその内容も、人びとの意識・認識や記憶にもとづいた〝外来文化〟の想定であり復原である。聴取調査による想定や復原は、まず第一に、現地の人びとの主観を通して得られるだけに、その

客観性はすでに素材の段階でゆがめられている。そして第二に、このような素材は、記憶のなかでは忘却されることがいちぢるしい。したがって調査の限界がおのずと定められる。しかしこの種の研究の将来への発端は、聴取調査より得られるのであり、今後の比較研究のためにも、現段階における研究成果を、覚書のかたちにおいてであるが、公表すべきであると考え、不十分ではあるが、ここに報告する次第である。

第Ⅱ章　研究の目的と方法

個別文化を研究の対象とし、その文化全体をとらえようとする場合、大別して三つのことなったアプローチがあるようにおもわれる。第一は、個別文化の存在を、かの農業経済学者、J・ハインリッヒ・フォン・チューネンの《孤立国》のように、閉鎖隔絶的な存在とみたて、当該文化独自の体系を描写しようとする方法である。この視点および方法は、とくに島嶼研究によくみうけられ、しばしばこの視点および方法によって、われわれは《民族誌》的成果を、世に問うてきている。第二は、個別文化の存在を、R・レッドフィールドらのアメリカ文化人類学における共同体研究者たちがもちいる《部分社会》の概念のように、全体社会に影響をうける存在として考え、当該文化のひらかれた体系を描写しようとする方法である。この視点および方法によって、とくに民俗社会・農民社会など、全体社会としての国家の影響がさけがたい諸社会の研究に、われわれの研究は成果をあげてきた。そして第三は、個別文化の存在を、cluster of cultures あるいは、network of cultures の一単位として位置づけ、諸文化間の関係を考慮し、前提としたうえで、当該文化の他文化との交流を描写しようとする方法である。この視点および方法による成果は、文化の未開・文明を問わず、異民族間の相互交流のきわめて顕著な地域の文化研究に、少なからずみうけられるものであった。

用語として適切であるかどうかの判断はひとまず置くとして、これらの三つのアプローチによる個別文化のとらえ方を、それぞれ順に《孤立文化的把握》・《部分文化的把握》、および《関連文化的把握》というように、かりに命名して類別するならば、今回ここに報告するわれわれの研究は、《関連文化的把握》による文化理解を、おもな目的としたものということができる。

与那国島の文化を把握しようとするには、これら三つのアプローチのどれをもちいても、意義深い研究をおこなうことが可能である。与那国島は、後章でも触れるように、四隣の島々からは、数十キロも離れた、絶海の孤島であり、事実、八重山群島のなかでも、はるか西方にひとつ抜きんでて隔絶され、したがって行政区においても、現在の与那国島は、独立した単位を構成している。このような自然地理学的位置にかんがみ、与那国島の文化をも、孤立独立した単位としてとらえることは、有効でないとはいえず、また今日までの与那国文化研究史をかえりみても、この種の視点にうらうちされた研究が盛んであったようにおもえるのである。

しかしながら、この孤島は、史書の多くが示すように、有史以来沖縄

文化の最西縁に位置づけられており、沖縄文化の極西の島嶼として認識され、台湾島とは厳然として区別されてきた。「与那国ハ極西の孤島ニシテ台湾ヲ距ル二十余里　夜中時ニ火光ヲ認ムト云フ」。伊地知貞馨の『沖縄志』（明治十年）その他に代表されるような《地理認識》は、いまもって国家領域にもとづくわれわれ一般の、与那国島の位置づけであり、台湾島を領有していた戦前においてさえ、植民地としからざる地域との境界を、与那国・台湾間に画してきた経緯がある。この事実こそ、中央の影響を色濃くうけつづけてきた与那国文化の性格を暗示するものである。

国家的影響下にある与那国、国家が首里・那覇を中央とする琉球国であれ、鹿児島あるいは東京を影響の中枢とする大和の宗主国であれ、それらの国家的影響は、与那国島において生成され、変容し、伝統を破壊し、あるいは伝統を創造してきたのである。しかしながら、そのような与那国の部分文化的性格をみとめてもなお、沖縄－与那国間、八重山（石垣）－与那国間その他の関係は、部分と全体との関係につきるものではない。国家的影響がともなうにせよ、ともなわないにせよ、むしろそのような次元の関係とは別個に与那国島の文化は、他との交流を経て形成され、あるいは維持・発展した痕跡や事実がみとめられている。その痕跡や事実についての推測や解釈は、考古学的分野において最もいちぢるしいが、またわれわれの分野である民俗学や文化人類学においても指摘しうる痕跡や事実がある。それは、われわれが対象としうる近代・現代において最も顕著である。

与那国文化を他文化との接触や交流においてとらえること、しかもまた、与那国文化の部分文化的要素ではない側面においてとらえることの最も明確な領域は、琉球文化や、沖縄文化といわれない地域との文化接触や交流をしめしてみせることのなかにあるはずである。今回のこの報告が、紙幅の関係もあることはもちろんであるが、沖縄文化内の他の島島との接触・交流をのぞいてのべようとすることの意図が、このような理由によっていることを、まず十分に理解ねがう次第である。

与那国島にとって、その文化的関係がすこぶる重要な地域は、台湾島であり、中国大陸であり、そして紅毛人たちの世界の総称、オランダその他である。さて、本論にはいるまえに、叙述に必要な与那国島の概要を、まずのべておくことにしたい。

第Ⅲ章　与那国島の概要

第一節　自然環境

与那国島は、琉球列島最西南部を占める、八重山群島中の一孤島で、琉球列島中最西端に位置している。八重山群島のなかでも与那国島は、きわだって西方はるか海上にあり、この一島だけ特異な位置をしめている。地理上の位置は、北緯二十四度二十六分四十秒～二十四度二十九分二十二秒、東経百二十二度五十五分十二秒～百二十三度一分二十四秒にあり、台湾基隆までおよそ百五十三・七キロメートル、台北までおよそ百七十六キロメートル、台湾東端烏厳角までおよそ七十四キロメートル

あまり、東は八重山群島中の主島、石垣島までおよそ百二十七キロメートル、同じく西表島までおよそ七十九・六キロメートルの海域にあって、東シナ海と太平洋を分断している。沖縄本島の那覇からは、およそ五百二十キロメートル西南にあり、この海域の距離の遠さが想像できるとおもわれる。交通距離では、現在、石垣島から定期船が出ており、その定期船（百七十八トン）で約六時間、航空機（DHC）で、石垣空港から約二十七分である。往時は、西表から舟で約六～七時間、台湾東端漁港蘇澳からは約五～六時間かかったといわれる。

琉球列島最極西の僻島、与那国島は面積三〇、九〇九方粁、二九七、八〇〇aあるいは、二八・五二平方キロメートルといわれ、八重山群島中最大の島嶼、西表島のおよそ十分の一、八重山群島中の主島、石垣島のおよそ八分の一の面積にすぎないが、八重山群島中では、第三位のひろさをもっている。島は東西にして十一キロメートル、南北にして四キロメートルほどであり、東に宇良部岳（二三一メートル高）、西に久部良岳（一八八メートル高）の主要二岳をいただいている。全体として島は、一二〇メートル以下の台地状地形をなしており、海岸のほとんどは、三〇～一〇〇メートルの断崖となっている。

この島の主要部分は、照葉樹林の群落でおおわれており、海岸部には海岸植物群落がある。人びとは生活のため、このような植物を生活資材に、食料に、あるいは祭具にと利用し役立てているが、照葉樹林文化といった文化的特徴があるかないかの議論は、慎重を要するところである。気温は、最高月平均二八・六度（摂氏）、最低月平均一六・〇度、年平均二十三・五度と、亜熱帯気候の性格をよくあらわしている。雨量は、年間降水量二四一九ミリを記録し、月平均二、〇〇ミリあまりの雨がふる、列島中最高の多雨地帯にあたる。なべてこの島は、亜熱帯降雨林の高温多雨地帯にはいり、台湾基隆地域とよく似た気候的特色をもつ。

第二節　人文概況

与那国島は、昭和四十九年三月三十一日現在で、六百十一世帯、二千三百八十四人の人びとが生活しており、島別人口としては、八重山群島内で主島、石垣島につぐ規模となっている。集落は、北に行政の中心地祖納（そなえ）があり（四百六世帯、千五百四十三人）、西に久部良（くぶら・百六十一世帯、六百七十二人）があり、さらに南には比川（ひがわ・四十四世帯、百六十九人）の三つの集落がある。なかでも祖納はもっとも人口の多い集落であり、この島のおよそ三分の二の人びとが生活している。久部良は漁港として、ここ数十年来急速に発展した集落であり、漁業をおもな生業とする人びとが生活している。比川は、往時は百戸をこえる集落であったといわれているが、近年の人口減少はとくにいちぢるしい。百年前にくらべると、与那国島全体の人口は、ほぼ二倍近くにふえてはいるものの、最盛期に五千人を越えた時期を境として、最近の二十年間には、毎年百人から三百人ずつ人口減少が生じており、ことに比川は、深刻な人口問題をかかえるまでになっている。

与那国島は、昭和四十六年には、農業従事者が、全産業人口の六十六・六％と、ほぼ三分の二を占めており、古来から農業立島であった。

とくにこの島は、《田国島》の代表とされ、水稲耕作を基幹とする農業をいとなんできた。伝統的に水稲耕作を主体としてきたこの島も、昭和三十七年ごろから、他の島々と同様、サトウキビを主要な作物とするようになった。この換金作物の導入は、この島に大きな社会的変化をもたらした。稲米は輸出用に、サツマイモは自給用にと栽培していた農業経営が、サトウキビの導入により、キトウキビを輸出＝換金用に、稲米を自給用に栽培できるようになり、食生活や換金経済が急速に変化する一方で、換金経済の進展により、人びとの島外転出をも急速にうながすようになってしまった。近年はさらに観光化が進み、いまや与那国島は、観光立島に完全に変貌しつつある。

与那国島で軽視することのできないものに家畜飼育がある。五百年前の記録にも、牛鶏の飼育が記録されており、また八十年前には、養鶏が盛んで、他に牛・馬・豚・山羊の飼育が盛んであったことが記録されている。その後の変化といえば、台湾から水牛が導入されたことぐらいであろう。今日も豚をはじめとする家畜は、輸出の品目にもあげられており、また聖・俗両生活において、家畜の食用的・象徴的意義は少なからぬものがある。

第Ⅳ章　文化接触と文化交流の相手

第Ⅰ章の研究の目的と方法においてすでに触れたように、本報告は、与那国島における伝統文化と外来文化との間の文化接触や文化交流について、沖縄文化内部の島々との相互交流以外の問題についてのべようとするものである。くわえて、与那国島の伝統文化の内容がいかなるものであるのかについては、本報告の「姉妹篇」である『与那国の文化』（昭和五十五年）で詳細に触れてあるので、本報告では、あえて詳述しない。

与那国島が、首里・那覇を中心とする琉球王国の支配下に服したのは、史家の説明するところ、一三九〇年とも、一五一〇年ともいわれており、いずれにしても与那国島は、数百年このかた、沖縄文化の圏内に置かれてきたのである。このような歴史的因果から、これまでの研究においては、孤島としての与那国島の、独自の文化的特色、および沖縄の影響下にあることで同等の、沖縄本島およびその他の琉球列島上の島々との比較研究が、数多く発表報告されてきた。われわれも、これまでの沖縄研究のように、そのような研究もまた同時平行するかたちでおこない、調査をすすめたわけであるが、そのような研究では、どうしても理解しがたい、いくつかの伝承にあたったのである。それは、与那国島の文化が、沖縄本島や八重山、とくに石垣島からの文化的影響をうけ、それを与那国島なりに受容・吸収し、やがて与那国島独自の伝統文化として、文化形成をおこなったというプロセス以外に、そればかりではなくしてほかに、台湾島およびその周辺の島々や、中国大陸その他からも文化的影響をうけ、あるいは影響をうけないまでも、与那国島の人びとが何らかのかたちで、外来文化との接触をおこなったであろうと推測しうる伝承がみとめられたことに由来する。

ここに外来文化と称するものは、伝承のはばひろく多様な状況を考慮

して、かなり広義の概念として設定しておきたいとおもう。第一に、それはたんなる海外認識にすぎないものをもふくめて、神話・伝説にみとめられる文化接触の相手としての存在を、第二にそれは、客観的に、実際にあったことがらとして、とらえることのできる文化交流の相手としての存在を、第三にそれは、神話伝説にも、はたまた文化的交流の事実にもみとめることはできないが、与那国島周辺の島々との比較研究を通じて、パラレルな類似をみせる文化をもった相手としての存在を、意味するものとして設定しておきたいとおもう。

第三番目の概念にふくみいれられる外来文化は、そもそも外来文化として認定するためには、第二番目の概念でとらえうるような証拠がなければ、実際には外来文化とはいえず、したがって概念上の無理があるが、第二番目の定義・概念でいうところの外来文化の発見のために、しばしばわれわれは、大胆ともおもえるこの概念から、文化の出自を探索してきた研究史をもっており、外来文化の研究にとって、この概念はあながち無視できないものがある。ただし、パラレルな類似を認定する作業は、今回ここに報告をおこなうまでには不十分であり、目下進行中の研究でもあるので、あえて触れていない。ここに報告する外来文化としての相手の所在は、したがってさきの概念にいう、第一、第二の外来文化にある。

第V章　文化接触の痕跡

以下にのべる内容の多くは、通常、神話・伝説上の問題としてのべられる傾向にあるものである。しかしながら、それらの伝承が、すべて人びとの想像力の所産であり架空のものであったのなら、それではどうして、文化接触の相手を区別・識別し、相手によって認識やものごとの起源や伝承の内容をちがえるものか、説明がつかなくなる類の伝承である。そこにはかつて、何らかのかたちで文化接触があり、それが大いなる話の題材となって、後代に神話や伝説として、いみのある内容をととのえ伝承されたのではないか、と解釈することが、当面では、より妥当なこととわれわれは想定しているのである。

文化接触の相手として、人びとの認識のうちにある第一は、タカサンチマである。タカサンチマとは、今日観光宣伝によくもちいられる遠望の島、台湾島のことである。与那国島において、以前よりは認識がうすれたものの台湾は、海賊あるいは食人種のすむ島という認識がある。史書の説明のほうがかなりリアルなのであるが、現在でも、たとえば比川においては、村落移動がおこなわれたという伝承のなかで、少なくとも二回は、この海賊襲来が原因とされ、伝えられている。海賊と食人種とは一致していて、襲ってきてはひとを食べるというので、往時は大草鞋を海に流し、そして現在は雑多な食物をいれた舟を海に流して、「異国人大国人退散のための祭り」と称する秋の大祭、久部良祭りを象徴的におこなっている。

それと類種の認識に属するが、台湾東南部にうかぶ火焼島・紅頭嶼の二島の住人に対する伝承もあり、以下のような話がきかれるのである。

現代から数えて四〜五代前の先祖が、漁に出かけたが流されてしまい、ある島にたどりついてしまった。そこは火焼島であった。与那国ではこの島をアヤジマとよぶ。そこの住民は、鍋でものを煮るということをせず、バナナやサトイモなどを生まで食べていた。先祖は、お腹がすいてしまったので、その島にあるものを、とって食べた。すると、この島の土人がやってきて、「どうして自分たちのものをとるのだ」という。そして、自分たちの大将をつれてきたら、おまえは首をかられてしまうのだ、というまねをしてみせる。「それならばおまえたちの大将をつれてこい」と先祖は勇んでいうと、角の長い山羊に乗った白ひげの王様がやってきた。そこで先祖は、すかさず王様のひげをつかんで投げとばし、その山羊の首を切って、流れる生血を飲んでみせたので、土人たちはみんなにげてしまった。

アヤジマの近くには、コウショウトウ（紅頭嶼）がある。この島の人びとも背丈は大きいが、火でものを煮ることを知らない。

このような話を聞いて、それが歴史的事実か、それとも神話・伝説上の事実かと問われるならば、もちろんこの種の話の内容は、後者の部類にはいるべきものである。ただこの話のなかで重要な題材は、海賊／食人／首狩りとつながる一連の蛮行が、タカサンチマおよびその周辺離島の民俗地理的認識の内容にある、ということであり、この内容が、与那国の人びとの認識における他地域の特徴ではない、ということである。最近は、ベトナム難民の漂着さわぎもあって、「異国人大国人」なるものの対象ともなるかのごときうわさも、日常会話のなかで耳にしたが、こうした文化接触が、今後どのようなモチーフを形成するかは、わからないことである。

第二の相手は、トウともタイとも称される、中国大陸のことである。近年、タカサンチマをタイワンと称するように、中国大陸は、シナとよび称されることが普通である。中国大陸に関連する認識や接触の伝承は、かなりはばひろく、タカサンチマのそれとはまったくちがって、みのまわりの事物や家宝、あるいは祭具その他、自分の先祖がなした業を伝えるいわれのなかで、物語られている。そのうちもっとも顕著で、しかも興味ぶかい伝承として、農耕起源に関する説話、家宝の由来、祭具の起源に関する説話を、例にあげておきたいとおもう。

祖納にある友利家の先祖が、いまから九百年もまえに、与那国島に米をはじめとして、粟・麦・豆・それに野菜を、タイ（中国大陸）からもって帰ってきた。その種を植えると、やがて豊かにみのり、そのお礼として、その収穫物をたずさえて、ふたたびタイにむかった。

この話は、複数の老人が語る農耕起源の説話で、この話には、つぎのような家宝の由来にまつわる話が付随している。

ふたたび中国に渡った友利家の先祖は、今度は二十五年も与那国

に帰ってはこなかった。そのため、友利家の家族は、先祖が死んでしまったものとあきらめていた。しかし二十五年ののち、先祖は中国からみやげとして、タマをもって帰ってきた。以来、そのタマを家宝として、線香をあげて拝んだ。

ここにいう〝タマ〟とは、勾玉のほか、鏡・槍・胡弓などの祭器である。このような由緒ある祭器は、秋の大祭に神器として飾り祀られることが、現在でもおこなわれている。こうした神器は、友利家にかぎらず、秋の大祭で祭場となる多くの旧家に伝えられ、うちいくつかは、やはり中国出自の伝承にうらうちされたものである。

また、このように特定の旧家に伝えられたものではないが、一般にもちいられる祭具として、その起源を説く話も、以下のように伝えられている。

シナはトウの国から商人が、紙と線香を積んで、沖縄へあきないをしにやってきたが、沖縄全島ことごとく、その品物を買う者がいなかった。そこで船員たちは知恵をしぼり、策をたてた。一舟は沖にやり、一舟は桟橋にいて、桟橋に着けた舟のなかで、船員たちはその品物を焼いてしまったのである。「どうして焼いているのか」と、沖縄の人びとは問いたずねると、船員たちは答えて、「もう一舟の舟が沖で遭難してしまったので、それをたすけるために、紙を焼き、線香をたてているのだ」という。すると不思議なことに、沖で遭難したはずの舟はたすかって、やがてもどってきたので、それをみた沖縄の人びとは、紙焼きと線香焚きが遭難救助に益あるものだと信じ、それ以来、その品物を買いもとめたという。

この話は、中国人にだまされて、紙焼き（与那国ではディンウヤシと称する）と焚香の習俗が今日まで伝わっているのだという滑稽話として伝えられているが、儀礼の機会あるごとに、沖縄の人びとが紙をもやしては香をたてるという今日の習俗を、中国からもたらされたものとして認識しているよい例、よい説明となっている。伝播の事実がどうであれ、中国から伝来したものだと説明される祭具には、このような紙銭や線香のほか、位牌や磁石、楽器など種々あって、こと祭具に関する出自伝承は、比較的豊かであるようにおもわれる。事実、このような祭具の伝来は中国からのものであることが知られてもおり、それが実際には中国大陸ではなくして、台湾中国からのものであったとしても、この話の文脈や認識とは、別問題である。

以上、中国大陸との関係を想定しうる例を、三種紹介してみたが、そのほか中国大陸との関係をものがたる話は、大陸への航海で功をえた人物の話、大陸へ移住した人物の話、中国人との取引きをした話などがあり、人的、物的交流や接触をうらづけるかのような話が散見されるのである。

第三の相手は、オランダである。オランダと聞いてわれわれは、実在の国、ヨーロッパはオランダの国をすぐさま想起してしまうが、オラン

ダとはかつての紅毛人の国一般をさしていうのであり、それはひとり与那国島においてのみならず、石垣・沖縄その他この諸島の一般の認識であったようである。[1] それが戦後にいたっては、アメリカに名がかわったのも、歴史的事実もさることながら、固定化した異郷人の分類認識や、人種分類のカテゴリーに由来するとみてよいのではなかろうか。

さてこの紅毛人に対する与那国の人びとの位置づけは、まことに興味深い。台湾は卑近な蛮行の世界であり、中国大陸は、洋上を航行して物資搬入や取り引きをしうる先祖たちの世界であるのに対して、このオランダなる世界は、距離も遠くまた時間も遠い神話的世界にあるようである。したがってオランダが宇宙起源や事物の起源の題材になるのも、与那国の人びとと同じ世界を共有しえない超絶的な存在だからなのであろう。そのひとつ、与那国起源説話に登場するオランダをみてみたい。

そのむかし、この海域にはユニがあった。それは小さな砂場であった。そこに、南方からやってきたオランダ人が、やどかりをつけた矢を放ち、ユニに命中させた。やどかりが繁殖するかどうかを知ることによって、そこに人間が住めるかどうかを判断するためである。矢を放ったオランダ人の船は、そのままどこかにゆき、その帰路かれらが双眼鏡でユニをみてみると、やどかりが繁殖して、ユニが大きくなっているのを発見した。やどかりは、前にも後にも動くことができ、土を後方へかき出すので、ユニを大きくしたのである。これならば人が住めるということになり、船は南方に帰っていった。

与那国起源の説話は、まだこのほかにも二〜三伝えられたものがある。問題はオランダ人が与那国起源説話にも登場しうる存在であること、かれらの特徴は、洋上を航行し、双眼鏡を携帯する存在であること、などである。まえにものべたように、このオランダ人が、十七世紀当時台湾南部を領有していた事実を、この話は物語っているのではない。むしろ紅毛人一般が、したがってその国は英仏米露蘭西いずれでもよいが、かつて頻繁に東シナ海を航行し、沖縄や八重山の海域に出没し、難波、碇泊、上陸をおこなった史実が、なにがしかこうした話の題材になったのではないか、ということである。八重山近海に流布したうわさであってもよい、何しろかれらはこの世にない他界における、超絶的存在であった。

十一世紀ごろ、オランダが各国を統一していたとき、オランダは各地にアンダアメ（油雨）を降らせ、世界を焼きはらっていた。与那国にもアンダアメが降り、すべてが焼き払われてしまった。この焼け跡から、最初に再生してきたのは、比川のモイのクチ（森のうしろ）の浜に出た、サカキの小さな芽であった。このサカキを与那国ではチノビという。サカキがいちばん最初に出てきたので、これを神にささげるようになった。これがモイのクチ（燃え残り）の話である。

神々にまつわる話として重要なこの説話にも、オランダが登場する。

この話の文脈からすれば、何もオランダは必然的なものではなく、世界を焼きはらうだけの能力をもつ存在であれば何でもよいであろうが、この地位にオランダが位する、というのは、オランダが超絶的なちからをもつ神々の世界にあるからである。

そのむかし、オランダで世界中のかじやをあつめて、大会がひらかれた。与那国のかじやも、沖縄一帯のかじやとともに、その大会に参加した。かじやたちが、この競技会でつくるべき品目は、事前には知らされていなかった。大会の前の晩、与那国のかじやは夢をみて、その夢のなかで、ハサミに似たものが今大会の出題品目であることを知った。当日の大会での出題品目は、夢でみたとおりやはりハサミであった。与那国のかじやは、順調に仕事をすすめた。大会が終わったあと、一度かじやは与那国にもどってきた。そののち、入賞者だけが、ふたたびオランダに招喚された。与那国のかじやは優賞していた。表彰が終わって、帰途順調に沖縄本島付近の海上を航海していたが、宮古島をすぎたあたりの、島影がみえなくなったところで、かじやの仲間に嫉妬され、そのかじやは道具もろとも、海へ投げこまれてしまった。洋上にひとりだけ残されたそのかじやは、与那国にむかってひたすら泳ぎつづけたが、しだいにちからが尽きはじめた。そのとき、かじやは、かじやの神と竜宮神に、「もしわたくしを救ってくださるならば、わたくしは一生神さまをおまつり申しあげます。どうかわたくしをお救いください」、と祈った。すると、その言葉を聞いた神々は、かじやを救ったのであろう、かじやは無事与那国島に生還したのである。そのかじやは、以後、自分の屋敷にビディリ（社祠）をもうけ、これらふたつの神々を祀ったのである。

与那国の話者の語るところによれば、この話は、オランダと貿易をしていた時代の実話である、とのことである。しかしわれわれにとってこの話は、実話かいなかの問題よりも、この話のモチーフや題材に重要な関心をもつことは当然である。かじやの存在意味、かじやの神や竜宮神の存在、その祭祀方法等々の、神話学的・宗教人類学的問題は、また別個に考えるとして、かじやの大会を開催しうるオランダが、ここでは問題となる。かじやとは、オランダなる異国でその技術をみとめられるべき職業のようであり、またオランダとは、かじやの技術を認定しうる存在のようである。

以上、オランダは、与那国にとって遠い異国であり、神性を帯びた世界である。このような世界にすむ紅毛人たちと、与那国の人びとがいかなる接触をしたのか、その実際を、これらの物語ではとうてい判断することはできないし、たとえ接触の事実を伝承のなかにふくめていたとしても、それがどのような内容であれ、かならずや神話化していたであろう。オランダは時間的にも遠い存在なのである。

台湾・中国大陸・オランダの三世界について紹介したが、まだそのほかにも与那国の人びとの知る異郷が存在する。が、以上の三世界より話

の内容も豊富ではないし、ここにとりあげるだけの十分な認識上の特徴がみとめられないので、除外することにする。

第VI章　文化交流の事実

前章の話は、与那国の人びとの記憶のなかでは、あまりにも漠然とした世界であり、われわれにとってもまた、客観的データのえられない不確かな素材でありすぎており、前章の問題を文化接触の素材としてさえ、とりあげることに疑義をいだく研究者も少なくないとおもわれる。

それでは、実際に文化交流のあった、史実としても比較的たしかな事例はどうか、ということになるが、沖縄や石垣など、沖縄文化圏内にある島々との交流を除けば、台湾と与那国との関係が、最も有力な事例として、あがってくるのではないかとおもわれる。

台湾と与那国との交流は、明治二十七年（一八九四）、両島間に国際法上の国境がなくなって以来、明確になりはじめる。しかし、国境の島であるとの理由から、明治二十一年（一八八八）に設置された、那覇警察署直轄の与那国分署は、明治二十七年以降も相変らず設置されつづけ、ようやく明治三十四年（一九〇一）になって、台湾が平定されたとの判断から、与那国分署は与那国駐在所となり、交流を容易ならしめる処置がとられたのである。しかしこのような制度上の緩和処置がとられても、両島間の交流は、双方に影響をあたえるまでには至らず、実際に両島間の交流が盛んになりだすのは、大正中期、一九一〇年代からであって、そのころになると、発動機船による定期の往来があったようである。そして、そのころの定期船は、村有・私有あわせて四隻で、一日やく一往復していたようである。与那国の人びとの話では、当時は石垣へ行くよりは、台湾へ行くほうがはるかに便利であったという。また定期船だけでなく、漁船による行き来もあり、漁師は台湾の蘇澳まで、五～六時間で行ったといい、与那国島を早朝に発って、沖でかつおを釣り、蘇澳にたちよってそこでかつおを売却し、その日蘇澳を発って、また沖でかつおを釣りながら、与那国島にもどることができたという。

定期船は、戦前まで、与那国―台湾間のほか、大阪の商船が、那覇―基隆間を年六回往復し、郵便船もまた、那覇―多良間―与那国―基隆間を航行、徴兵検査の船も、与那国島に寄港して、台湾へ行くというルートをとっていた。このように、与那国―台湾間は、多種多様な船が航行しており、当然のことながら、多面にわたる両島間の交流は興隆をきわめたのである。

昭和初期、このころ与那国では、尋常小学校や高等小学校を出るとすぐ、台湾へ働きに出る者が多く、台湾総督府をはじめとして、台湾鉄道部、大阪系の台湾商社、商店、女中奉公など、台湾で各種の職業につき、また、沖縄の漁師が台湾に漁業を教えに渡ったりしたときにも、与那国の人びともその技術指導員にふくまれていたといわれる。こうして客船といわず、貨物船・漁船といわず、与那国から観光目的のような一時的滞在をふくめて、台湾に渡った経験のある者は、ほとんどであるといってよく、「台湾は当時非常にひらけていたので、与那国の人びとは台湾からの影響もあり、標準語（日本語）に慣れていたので、沖縄のそ

のほかの島々のひとたちよりも早く、出世することができた」との認識もまた、なるほどとおもわせる。

このころ、すなわち昭和初期のころには、与那国は日用雑貨のすべてといってよいほど台湾から輸入していたといわれ、とりわけ農業関係に重要な新式耕転具（タオシグルマ）、台中六十五号という新品種の稲などを輸入し、またメリケン粉・そうめん・杉材やひのき材など多くを台湾からとりいれていたといわれる。このような交易に対して、石垣からも、台湾産のものを仕入れるよう依頼もあったといわれている。

台湾からこのような輸入品があれば、また与那国から台湾へ輸出していたものもいたって多く、与那国から台湾への輸出品は、主として原料であった。一航海に七十～八十頭も輸出していたといわれる肉豚を筆頭にして、魚類、かつおぶし、石灰石、石材などを台湾に輸出していたといわれる。ついでながら与那国の輸出品として有名な米や芋などは、台湾にではなく、石垣や沖縄に輸出していたようである。当時の与那国では、台湾銀行券も通用していたといわれ、まさに当時の与那国は、台湾経済圏の一角にあたっていた。

このような台湾交易の興隆は、与那国の経済のみならず、生活にも少なからぬ影響をおよぼすことになる。まず、台地中央に立地していた島仲村は、大正十二～三年ごろ、第一次大戦後の農業経営の不振と、台湾交易の隆盛という社会環境の変化にともなって、海岸に面している現在の祖納の南側・西側に、原野を開墾して住むという事態にたちいたる。また、比川そして久部良には、宮崎県や鹿児島県から移住してきた人びとにより、明治後期、かつお漁業やかつおぶし製造の技術が導入され、さらに与那国の人びとの独立経営が開始されるややがて、輸出生産を目して、久部良には昭和十一年に近代的な工場が建設されるに至る。それにともない、工場電力の確保や製氷工場の新設がなされたのも、付記されなければならない。

輸出用の漁業経営もさることながら、輸出用の肉豚の品種改良が実施されたのも、大正末年のことであり、それによって一九二〇年代、昭和初期の台湾交易の隆盛時代がやってきたし、石垣・沖縄向けの米穀生産増大のための新種の導入や農業の機械化のはしりをみたのも、昭和初期のころである。くわえて鉱業においては、台湾の高雄に本社をもつ炭酸会社の原料、石灰や石材（トラバーチン）の輸出のため、比川近くのカタバル浜が貨物船でにぎわったのも、昭和十四～十六年のことである。また比川には、造船業も発達したといわれており、こうした比川、久部良の繁栄により、両村の社会的な人口増大は、当時の画期的な現象であった。とくに良港として知られる現在の久部良こそは、当時の台湾交易が生んだと称してよいであろう新村である。

そして戦後。沖縄の中心地である沖縄本島が、第二次世界大戦最大にして最後の激戦地となってしまったいきさつもあり、終戦直後の沖縄各地は、復旧と自給自足の生活を余儀なくされたわけであるが、与那国島だけは、なかでもとりわけ特異な存在であった。

沖縄県は、日本本土と国境を画するにも似たかたちで切り離され、また与那国と台湾との間には、五十余年ぶりに国際法上の国境が設定さ

れ、沖縄県は米軍統治のもと、まったく孤立の憂き目にあってしまった。といって戦場と化してしまった那覇の経済力を頼むわけにもいかず、南北を閉鎖された沖縄各地は、米軍からの配給品にのみ頼っていては、とうてい旧来の生活状態を維持するわけにはいかなかった。このような状況が、与那国島を当時、特異な存在にした、と称してもよいであろう。終戦直後から与那国では、台湾との密貿易がおこなわれていたのである。

当時の沖縄各地は、生活物資をとりわけ必要としていたにもかかわらず、国境線が四周にひかれてしまうというこの矛盾は、当然に密貿易をいっそううながすということになる。与那国では、かつての台湾交易隆盛時代のように、台湾銀行券こそまったく通用しなくなったものの、今度はバーター取引きによる物々交換によって、与那国島はもちろんのこと、沖縄各地で必要としている生活資材を入手するという、地理的に好条件にめぐまれた地位に身をおくことになる。したがって、与那国島のなかでも、とりわけ台湾にいちばん近い久部良が、密貿易には最適の場となっていく。当時の沖縄県では、八重山群島が栄え、八重山群島内では与那国島が栄え、与那国島のなかでは久部良が栄えるというありさまを、人口増加によってもしめすことができる。与那国島全島の人口が五千名に達したのも、終戦後の十年間のうちにである。人びとの語るように、台湾との密貿易の時代は、与那国島の全盛期であった、という指摘も決して過言ではない。この密貿易時代は、およそ十年間ほどのものであったといわれているが、当時の統治者であった米軍も、数年の間は、

沖縄各地の実情を考慮して、密貿易を黙認していたという。

この密貿易で台湾から輸入したものは、人びとの語るところ、洋服・ライター油・ライター石・紙・お菓子・砂糖・サッカリン・赤米・メリケン粉・バナナなどであり、その他多種多様な日用雑貨の類があったようである。逆に与那国から台湾へと輸出したものは、米軍からの配給品や与那国産の薬草イスキクなどであり、とくに台湾は、米軍の配給服やかんづめなどを好んだといわれている。その他仔細にいえば、米軍からの配給品である小麦粉や米・麦・薬品なども流れていたようである。

この密貿易によってもたらされた与那国への影響は少なからぬものがあった。まず久部良の急速なる発展。水害その他の悪条件がかさなったこともてつだって、比川から久部良へと移住する家は少なくなく、また祖納からの移住もあったであろうと予測される。村の盛衰は、この時期にまた急速にすすんだのである。そして人びとの食生活の変化。戦前、戦中を通じてサツマイモ主食であった時代は、戦後このころより米食中心となりはじめる。ただし、米食中心になる最大のきっかけは、やはり昭和三十年代中葉からのサトウキビ生産の増大によることはいなめない。が、食生活の変化の端緒はすでにこの時期にめばえていたのである。そして戦後まもなく、台湾から導入した水牛は、水田耕作を大いに容易ならしめたようである。ただこのような台湾からの輸入品や影響を考えるうえで、とりわけわれわれが期待していた、社会生活や宗教生活への影響や変化が、人びとの口から聞くことができず、意識にもあがっていなかったのが残念でならないことである。

台湾との交易隆盛時代といわず、密貿易時代といわず、たとえば現在でもその重要性がみとめられる、卑近な宗教生活用具である磁石計（カラハイ）・こよみ・長大な線香・紙銭・掛軸・香炉・唐位牌・銅羅・崇拝される神器・等々の物質文化や、行事のことあるごとに並べられる供物の並べかた、その数、その供物の内容等々一連の祭式、あるいはおなじではないにしても部分的に類似している宗教的観念や儀礼上のプロセスなど、かならずしも人びとの意識にはのぼらない、台湾からの影響ではないかと想定しうるようなパラレルな類似点は、聴取調査によってはもはや限界のあるものであり、今後の比較研究にまたなければならない点である。いまあげた物質文化における、あきらかに中国的習俗[2)]と目されるものは、現在においては、多くは石垣から、あるいは沖縄は那覇から、導入しているものである。間接的に導入しているそれらの習俗が、かつては台湾との交易のなかでもまた導入されたのではないか、という疑問は、依然としてぬぐえないまま残されている。ましてや文化伝播が、史実としても確かなほど、中国大陸やその他からなされたということが今後の研究で判明したとしたなら、与那国島は沖縄研究にとって重大な問題を呈示することになるはずである。

第VII章　今後の課題として

以上、聴取調査によって得られた資料にもとづき、現段階で想定・復原しうる、与那国島と周辺地域との文化接触および文化交流についてのべてきた。与那国島の歴史のなかで、海外交流の歴史はいかなる比重を占めてきたのか、われわれは当然のことながらわれわれの方法によって復原しうる部分と、しからざる部分のあることを、当初より痛切に感じとってきた。成果の良否のすべては、今回おこなった民俗学的および文化人類学的聴取調査に起因することであろう。

与那国島は最西端に位する沖縄文化の辺縁部にあるからこそ、これまでにいくつかの研究報告のなかで、海外諸文化との関係が指摘され、また推測されてきた。与那国の文化は、過去において台湾東部との関連があったのではないか、あるいはまた、華南地方との類似もみとめられる、という国分直一教授の推定（一九七六：三九七―三九九）、台湾本島のみならず、火焼島や紅頭嶼など、台湾東南部に点在する島々との文化の交流を伝える情報（牧野清　一九七二：六〇、六八）、八重山文化とメラネシア文化／インドネシア文化とは、確実に関連をもっているとする金関丈夫博士の定説（一九七七：一六―三四）、インドネシア語族圏の相互の関連性を推測し、その圏内の北端に与那国島を位置づけようとする、深作光貞教授の示唆（一九七五：三―六一）など枚挙するにいとまのないほどである。さらに与那国島と太平洋圏の社会、あるいは中国文化との比較研究から、双方の類似性を説く研究があれば、さらに広範にわたって本研究に対して指針を呈示することになるはずであるし、われわれの研究においても、沖縄文化領域の内と外とを問わず、比較研究上の類似性はすでに公表するものとなっている（cf.渡辺欣雄　一九七七：七一―九八、一九七九：一三七―一五九、植松明石　一九七八：二四三―二九二）。しかし、このような比較研究は、たんに実態調査ばか

りではなく、長期間にわたる机上の研究と、多くの討議を必要とするし、今回のわれわれの研究期間ではあまりにも短兵急な結論しか出せない研究に属するものである。今後の研究課題として第一にあげなければならないのは、このような机上の比較研究である。

また、今後の研究をおしすすめるうえで、無視してはならない問題は、与那国島が沖縄文化の辺縁部に位する島であるからといって、台湾島や中国大陸その他の地域との文化的関連が深いとはかぎらない、という逆説的な示唆のあることである。「晴天の日に台湾の高山を眺見できる与那国島で、七十海里ばかりの距離にすぎない台湾に関する口碑伝承が現実ばなれしているのは、いささかならず奇妙である」（一九七四：五〇〇―五〇一）との、与那国島の人びとの地理的認識を分析した馬淵東一教授の疑問は、本研究においても十分に解明することができたとはいいがたい。台湾島は海賊・食人種のいる蛮族の島であるという伝承では、台湾と与那国との現実的な文化関連をあきらかにすることはできないのである。あえて〝未開社会〟とはいうまい。この種の口碑伝承が唯一の資料となっている〝無文字社会〟（じつは与那国島は独特な有文字社会なのであるが）では、歴史の復原というわれわれの認識上の〝時間概念〟には序列づけられない、神話上の過去があり、そのほうが人びとにとっては重要な過去である場合が多く、われわれの〝歴史〟研究の無意味を、これまで幾度となく教えてきた経緯がある。ただしかし、馬淵教授も、この両島間の伝承上の無関連を、他の面にまでひろげて、関連の可能性を否定しているわけではない（cf.一九七四：四九一）ように、

われわれがここに示してきた両島間の文化交流は、明治後期から五十年余にわたってみとめられてきたのであり、今後は伝承上の無関連と、実際上との関連との間をうめる作業が残されてくるはずである。神話的な周辺諸島に対する認識とは別に、与那国の近代・現代を構成してきた周辺諸島との交流は、果して与那国島に何をもたらしたのか、この問題もまた、今回のわれわれの研究のなかでは十分に立証できたとはいいがたい。つい最近まで、台湾からの密航船があったといい、また台湾漁民の漂着などがわれわれの滞在中にもみとめられたような、与那国島の現実は、現在もなお台湾との関係が密接であることを示すものである。周辺諸文化からの与那国島への文化的影響の研究は、今後とも学際的な研究として継続されなければならない所以である。

注

1、〝オランダ〟なる民俗名称が、どのようにして一般化されたものか詳細は知らないが、ともかく二～三の例をみて、かつて沖縄人が異国人をどのようにみていたかの例としたい。

薩摩入り後の沖縄は、本土同様に切支丹排撃が薩摩を通じて強制されていたようであり、〝南蛮船漂着の時公事〟についても、「貞享二丑年〔一六八五年〕御条書には南蠻人は阿蘭人並唐人には相替別て念遣被成常々日本へ通融不仕様に堅爲被仰付事候…」（瀬名波長宣　一九四〇：七九）云々とあり、とりわけオランダ人および中国人は除いて、南蛮人は日本とは通融しないよう厳命されていたようである。したがって、民間においても友好的な異国人は、ひとつにオランダ人があったことはいなめない。そのような観念があって、人びとが漂着船をみたときには、まずオランダ船であろうと判断することは、ごく自然のようにもおもえるのである。

たとえば有名なサマラン号の石垣島への投錨の事件（一八四三年）、サマラン号を目撃した蔵元の役人たちは、「宮良村へ到着して異国船を見ると、三本マストの白帆の外に小さな数帆をかけた異彩な船は正しく〝オランダ船〟のよ

うであった」（喜舎場永昫　一九七七：三二二）という判断をし、のち通詞役を通じての話で、それが英国船であることを理解しなおしている。現在、沖縄の人びとが西洋人をみるとまず、アメリカ人であると判断するのとちょうどよく似ている。

つぎの一節は、伊波普猷の説明する百年余もまえの沖縄のことであるが、これも当時の海外認識をよく説明したものとなっている。

「一八五六年（安政三年）には、一月から二月にかけて、米船が頻繁に出入し、それに仏人の住宅が新しく出来て、異国人（オランダー）の市井に往来するもの多く、そのために歌舞音曲が禁ぜられ、商賈は門を閉ぢて業を休み、国内さながら喪中に在る心地がしたといはれてゐる。この時代を俗にウランダー時代といってゐる」（一九六二：四九七）。

米人・仏人みなウランダーであり、唐人・朝鮮人などの東洋人を除く紅毛人はみな、オランダ人であったのである。なお、かつて沖縄では紅毛人のことをウランダーと称し、紅毛人の漂着にあたっては、「ウランダーの漂着」というかたちで人びとが通報していた、という示唆を、南島史学会における懇談の際に、琉球大学付属図書館の新城安善氏からうかがうことができたのは、多大な示唆であった。

2、窪徳忠教授の永年にわたる「沖縄における中国的習俗」の研究は、中国の史書に発する中国の習俗が、沖縄の過去および現在にわたって、色濃い影響として残されているとするものである（一九七六、一九七八、その他）。窪教授の研究は〝外来文化〟の研究をおこなうにあたり、われわれの唱える比較研究に、示唆すること大であるといわねばならない。今後、われわれの長期にわたる調査成果のなかで、さらに多面的かつ詳細な類似を発見しようとする際、われわれはすでに、比較考究すべき指針を得ているようにおもわれる。

参考文献（アイウエオ順）

伊地知貞馨　一九七三　『沖縄志』　国書刊行会　覆刻版

伊波普猷　一九六二　「沖縄歴史物語」『伊波普猷選集』　中巻　沖縄タイムス社

植松明石　一九七八　「八重山の年中儀礼」『沖縄文化研究』　第五巻　法政大学沖縄文化研究所

金関丈夫　一九七七　「古代日本文化の源流」『日本民族と黒潮文化』　角川選書

喜舎場永昫　一九七七　『八重山民俗誌』　下巻　沖縄タイムス社

窪　徳忠　一九七六　「沖縄における中国的習俗」『民族学研究』四一―三

――――　一九七八　「中国の后土神信仰と沖縄」『沖縄の外来宗教――その受容と変容』　弘文堂

国分直一　一九七六　『環シナ海民族文化考』　慶友社

瀬名波長宣　一九四〇　「進貢船接貢船並朝鮮異國船日本他領の船漂着破損等の在番役々公事」『南島』一

深作光貞　一九七五　『海上の道　他界への道――与那国沖縄からマダガスカルまで』　世界思想社

牧野　清　一九七二　『新八重山歴史』　城野印刷所

馬淵東一　一九七四　『馬淵東一著作集』　第二巻　社会思想社

渡辺欣雄　一九七七　「供犠・饗宴をめぐる力学」『社会人類学年報』　第三巻　弘文堂

――――　一九七九　「沖縄文化地域における民家の塑形的モデル――試論として」『跡見学園女子大学紀要』　第一二号

〔昭和五十四年十二月五日擱筆〕